

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

黒タイ首領一族の系譜文書「家霊簿」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001408

I

黒タイ首領一族の系譜文書「家霊簿」について

1 黒タイの系譜文書

黒タイ (᠋ᠠᠨ ᠳᠤᠨ, Thái Đen) は、ベトナムの紅河以西、ダー河、マー河水系の各支谷と盆地で灌漑水稲耕作を営むタイ系言語集団の一つである。ベトナム公式の民族分類では、白タイ (᠋ᠠᠨ ᠠᠵᠤ᠋ᠰᠤ, ᠋ᠠᠨ ᠠᠵᠤ᠋ᠰᠤ, Thái Trắng) とともに、ターイ (Thái) という民族の地方グループとされている。ベトナムにおけるターイ人口は133万人 (1999年国勢調査¹⁾)、黒タイのみを対象にした人口統計はないが、各県の人口統計から類推すると60万人以上と考えられる。本稿では黒タイが継承してきた系譜文書を、黒タイ語、日本語の2言語で校注し、紹介する。

中国、朝鮮、琉球、ベトナムなどいわゆる漢字文化圏を中心に、一族の系譜を記した文書が継承されてきた。これらは原則として漢字で記され、譜、族譜、家譜、家牒、家乗、宗譜などさまざまな呼称されてきた。多賀 [1955] が「譜」と総称するこれらは、ある父系親族集団が系譜の確認のために編纂した私的な文書である。フランス植民地による行政統治が現ベトナム西北地方の村落部にまでおよぶ20世紀初頭まで、ベトナム王朝と清朝中国に多重服属していた黒タイ首領たちも、^{ソ・フイ・フォン}「家霊簿」(᠋ᠠᠨ ᠳᠤᠨ ᠠᠵᠤ᠋ᠰᠤ) とよばれる系譜文書を継承してきた。ベトナムでは家霊簿も一般に「家譜 (gia phả)」とベトナム語訳され、譜の一つと見なされてきた。しかし、家霊簿は漢文ではなく古クメール系の黒タイ文字で記されている点で、譜と一線を画している。また、ベトナムの民族的マジョリティであるキン (Kinh)²⁾ の父系集団ゾンホが継承してきた譜 (家譜) のよく整ったものだと、序文に始まり、始祖をはじめとする顕祖の功績、祖先の名前、配偶者、子、忌日、墓などまで記している [末成 1995: 8]。しかし、家霊簿では故人の姓名が列記されるだけで、各故人の兄弟姉妹関係、親子関係、婚姻関係は記述されない。つまり家霊簿が系譜文書として判断されるのは次の2点による。まず、そこに記されているのが亡くなった父系祖先の姓名であると現存している人々が言い、かつ彼らはこれを系譜文書であると意識していることである。次に、原則として陰暦元旦に各世帯で行われる家霊祭の祖先祭祀でこれが亡くなった父系祖先への祈祷のために用いられることである。家霊簿がもつ形態、内容、用法の特徴、黒タイがもつ父系理念や祖先祭祀の実践と家霊簿の関わりについては、他稿ですでに詳しく分析し、すでに公刊済みである [Cầm và Kashinaga 2003; 檜永 2005]。本稿ではむしろ、これまで確認されている黒タイの系譜資料のうち3書を実証的な歴史研究の素材として提供したい。ここで

1) 以下、1999年国勢調査のデータは、『国勢調査報告』[Tổng cục thống kê (biên soạn) 2001] による。

2) 1999年国勢調査によると、キンが総人口約7600万人のうち86.2%にあたる6580万人を占めている。

取り上げた3書は、いずれも19世紀末から1954年まで続いたフランス植民地期のムオン・ムオイ（トゥアンチャウ）首領とムオン・ムアツ（マイソン）首領の一族の系譜文書である。本稿には、これら全文の影印、黒タイ語による校注、日本語によるその訳注を掲載している。

これら3書を本稿で校訂する理由は、次の通りである。植民地期以前の首領一族の系譜文書としては、これらが現存しているものすべてだからである。一方で、1990年代以降、60歳代以上の高齢で黒タイ文字が読み書きできる人たちの中に家霊簿を自ら記す人が地方であらわれている。こうした新しい家霊簿を1999年以来筆者は3省5県で調査し、3書を収集している。3書とも、記述者が個人的に記憶している父系祖先の姓名を記しているメモのようなもので、世代深度でいえば父系の祖父の代までと浅い。これに対して本稿で扱う3書では世代深度が数十代におよぶ。したがって遠祖の系譜関係は、黒タイ各首領の系譜と事績を記した年代記『クアム・トー・ムオン (ကျမ် တွမ်)』との対照から確認されるという特徴を持つ。植民地期以前の首領一族の系譜文書と近年編纂され散る家霊簿とは、編纂時期が異なるのみならず、研究者が内容分析する際の手続きも異なっている。そこで本稿では前者3書に限って取り上げている。

2 3冊の系譜文書

これら3書は、いずれも20世紀初頭のムオン・ムアツ首領カム・オアイ (ခံ ဝေဝါ, Cầm Oai) [1871-1934] の実孫にあたるベトナムの人類学者カム・チョン (ခံ ဝေဝါ, Cầm Trọng) [1934-] が所蔵している。現在ハノイの集合住宅最上階にあるカム・チョン宅には、部屋の角の高い場所に神棚のような三角の祭壇³⁾ がしつらえられ、祖父カム・オアイの写真、父カム・ビン (ခံ ဝမ်, Cầm Vinh) [1907-1988] とその2人の妻の写真が飾られている。その小さな祭壇の上には、小さい香炉とともに、黒タイ文字で記

3)



ハノイのカム・チョン宅の祭壇
(2003年2月、左：筆者、右：カム・チョン 撮影：Yukti)

された3冊の文書が入ったビニールのA4版ファイルが置かれている。「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す (nl1vj ð6j x06 √ q16e n1v μx √ u√n äe i√v (xj i√x u√16 u√6 αo1v)」と題されたゾー紙 (giấy dó)⁴⁾ の線装本文書、そしてこれもゾー紙に記された線装本「セン・パーン・パイン (i√x u√16 u√6)」という題の文書、万年筆で記された無題の4葉8頁のA4版の古いノートからの切り取りの3冊である。これらは次のような形態の文書である。

- (1) 「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」(略称「啓定二年カム・オアイ家霊簿」)は、縦15cm×横30cmのゾー紙全8葉を綴じた線装本である。8葉のうち10頁が、毛筆によって記述されている。この文書の記述者は、カム・オアイがムオン・ムアツ首領であった時期にムオン・ムアツ行政組織機構内の「礼部 (n06j ð i√x u)」に属する宗教役職者の誰かと思われる。漢文の素養がある知識人による記述なのであろう。表題の「nl1vj ð6j x06 √ q16e n1v μx √ u√n äe (啓定二年二月閏拾八日)」の語順が漢文式であり、黒タイ語なら「nl1vj ð6j x06 √ q16e n1v μx √ u√n äe (拾八日二月閏二年啓定)」の順で記されるはずである。しかも奇妙なことに、「二月」の箇所だけが黒タイ文字表記ベトナム語で「二月 (q16e n1v, tháng hai)」と記されている。
- (2) 『セン・パーン・パイン』(略称「(スア・ムオン)カム・オアイ家霊簿」)は、縦15cm×横24cmのゾー紙33葉を綴じた線装本で⁵⁾、うち64頁にこれも毛筆による文字が書き込まれている。カム・チョンによると、この文書は、ムオン・ムアツのモ・ムオンであったハー・ヴァン・ナム (n1 n0u n1m) [1980年頃没、享年93] がカム・オアイの祖先をまつる儀礼、ムオンの祭礼を執行するときに、モ・ムオンが唱える文句を記した文書である。モ・ムオン (m i√6) とは、ムオン (i√6) と呼ばれる黒タイの伝統的な政治組織の中で、首領の魂の安寧を司り、ムオンの精霊であるフィー・ムオン (ã i√6) の祭祀を執行する礼部最高位の役職者である。セン・パーン・パインとは「鎮魂儀礼」と訳せようか。『セン・パーン・パイン』(「(スア・ムオン)カム・パイ家霊簿」)は、12の「スア・ムオン (i√x i√6)」とよばれる各章が集まって構成されている [Càm và Phan 1995 : 389]。その第10番目のスア・ムオンが「カム・ブン・オアイ公の

4) ゴー (dó) と呼ばれるジンチョウゲ科の落葉低木の一種を素材とする。ゾー紙は、鼠樹紙という和称もあるが、あまり通用していないため、以下ゾー紙と呼ぶことにした。

5) かつて筆者が他稿で縦13cm×横20cm [樫永 2000 : 178] と記したのは誤りである。

祭堂におけるセン・パーン・パイン (ixu√16 u√6 1wul u06e u06j We 1u1jǎ
√1 001√) いわゆる「カム・オアイの家霊簿」である。これが文書全33葉のうち5葉を占めていて、ハー・ヴァン・ナムが付したと思われる頁番号でいえば、第38～48頁(計11頁)にあたる。

- (3) 1950年代にルオン・ヴァン・ヌア (Lương Văn Nưà) がムオン・ムオイのバック・カム (w1njǎ, Bạc Cầm) 一族の系譜を整理して青インクで記したA4版学習ノートである。全4葉8頁からなる。題名が付されていないため、本稿では便宜上「バック・カム一族家霊簿ノート」とよぶ。

本稿では、カム・オアイをエゴとして書かれていることが確実な「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」, 「カム・ブン・オアイ公の祭堂におけるセン・パーン・パイン」の2書を「カム・オアイ家霊簿」と総称し、また両者を区別する必要がある場合は、前者を「啓定二年カム・オアイ家霊簿」、後者を「(スア・ムオン)カム・オアイ家霊簿」と略称する。

これら3冊の文書は、カム・チョンの父でありカム・オアイの次男であったカム・ビンが蒐集し、没後にカム・チョンが受け継いだ。カム・ビンがこれら3書をいつ、だから、どのように入手したのかをカム・チョンも明確には知らない。また「カム・オアイ家霊簿」には記述者の姓名が記されていない。「(スア・ムオン)カム・オアイ家霊簿」は、カム・オアイが首領であった時代にムオン・ムアツのモ・ムオンをつとめたハー・ヴァン・ナムが記したと考えられているが、筆跡から判断すると「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」もハー・ヴァン・ナムによるのかもしれない。すると、なぜ「啓定二年二月閏拾八日、セン・パーン・パイン・クアイの書を記す」と『セン・パーン・パイン』中の「(スア・ムオン)カム・オアイ家霊簿」とで内容と表現の違いが散見されるのかという疑問は生じる。しかし、ハー・ヴァン・ナム本人をはじめ、かつてのセン・パーン・パイン儀礼の実際の様子を記憶している人がほとんど生きていない現在、その理由は知るよしもない。前者「啓定二年カム・オアイ家霊簿」を筆写した人物がハー・ヴァン・ナムでないとしても、ハー・ヴァン・ナムと同様にムオン・ムアツの礼部に属する役職者が記述したことは確実である。

3 本稿の構成

本稿はVI部構成である。II部が3系譜文書の日本語校注、III部がこれら系譜文書と年代記述との対照から導き出される日本語による系図資料で、ここまでが日本語で記されている。IV部、V部は黒タイ語による系譜文書の日本語校注と系図資料である。さらにVI部が影印である。

前述のように、家霊簿の記述のみからでは記された各人の系譜関係は不明である。むしろ世代・親子・兄弟姉妹などの関係を明確に記述しない点こそが、黒タイ家霊簿の特徴であるとさえ言える。では、どのようにしてⅢ部とⅤ部のような系図を記すことができるのであろうか。これら系図の作成プロセスを、筆者の他稿の記述〔樫永 2005：286-293〕によりながら補足したい。

第一には、現存している人たちの記憶である。ただし「カム・オアイ家霊簿」は、現存の人が記憶しているよりはるかに多くの人物の名を記録している。「カム・オアイ家霊簿」で遠祖の世代・婚姻・兄弟関係を示すのは、天地開闢と始祖降臨からつながる各地の黒タイ首領の世系と事績を記した年代記『クアム・トー・ムオン』という別のテキストなのである。年代記『クアム・トー・ムオン』は、葬式のときに生者と故人双方に読み聞かせるためにも用いられる。「カム・オアイ家霊簿」には、ムオン・ムアットの『クアム・トー・ムオン』に登場する有名な父祖の名は必ず記載されている。『クアム・トー・ムオン』との対照により、家霊簿記述が自己中心的に近祖から遠祖まで遡っていることがわかるのである。ここには、父系祖先とその妻に加え、未婚のまま亡くなった女性の名も記述されていることがある。ただし、未婚のまま亡くなったと思われる女性についての記載は、エゴから2～3代以内に限定されている。おそらく未婚女性については、文書が記された当時の誰かがまだ生前の姿を記憶している人物にほぼ限定されて記述されていると思われる。

〔系図資料1〕〔系図資料2〕〔系図資料4〕について説明しておきたい。〔系図資料1〕は、ムオン・ムアットに伝わり、「カム・オアイ家霊簿」が記述されたのとほぼ同じ20世紀初頭に記された『クアム・トー・ムオン』写本⁶⁾（本稿では「クアム・トー・ムオン・ムアット」と略称）から作成した首領の系図である。つぎに家霊簿文書に名前が記載がある各祖先を、〔系図資料1〕を参照しながら作成したのが〔系図資料2〕と〔系図資料4〕である。これら〔系図資料2〕と〔系図資料4〕には注意すべき点がある。実は『クアム・トー・ムオン』に登場する各祖先の姓名と、カム・オアイをエゴとする家霊簿に登場する姓名は一致していない。つまり、いっぽうには記載があり、いっぽうには記載がない祖先が存在し、エゴに至るまでの両者の世代数も異なっている。そこで、双方の文書で一致する祖先を基準に、系図を作成すれば〔系図資料2〕と〔系図資料4〕のようになった。もちろん解釈次第によっては、違った系図にもなりえたかもしれない。

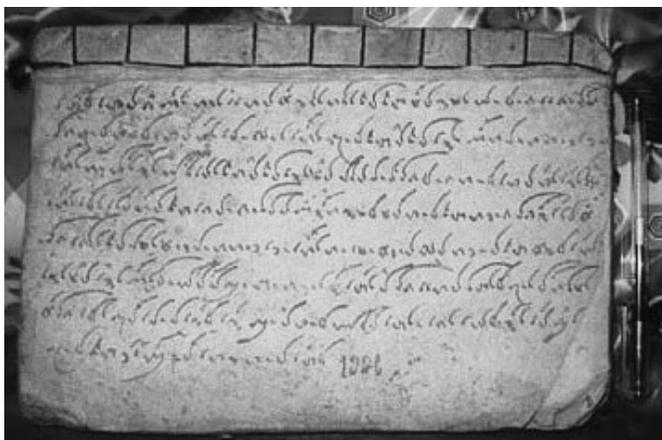
また〔系図資料1〕〔系図資料2〕〔系図資料4〕の作成の際には、煩雑さをさけるため、原則として妻など女性の名を省略した。ただしエゴであるカム・オアイの実父カム・チョム（ Căm Chôm ）の妻カム・ラー（ Căm Lả ）は例外である。

6) この原本は、拙稿〔樫永 2001〕ですでに日本語での訳注を公表している。詳しくはそちらを参照されたい。

なぜなら、『クアム・トー・ムオン』の記述によると、カム・チョムは、カム・イン (𑜋𑜂𑜆𑜨, Căm Inh) の娘カム・ラーを妻としカム・インの養子となった。そして、それまでのヴィー (𑜋𑜂, Vi) 姓からカム姓に改姓したとされ、したがって、カム・チョム、カム・ラー夫妻の上の代からは、カム・インの父系祖先の系譜を家霊簿文書は記している。

家霊簿文書には各祖先の世代や兄弟関係についての記述がないため、それを知るには年代記を参照しなくてはならない。黒タイ年代記としては『クアム・トー・ムオン』の他、『タイ・プー・サック (𑜋𑜂𑜆𑜨 𑜇𑜂𑜆𑜨 𑜋𑜂𑜆𑜨)⁷⁾』、『クアム・ファイン・ムオン (𑜋𑜂𑜆𑜨 𑜇𑜂𑜆𑜨 𑜋𑜂𑜆𑜨)⁸⁾』といった文書群も伝わっているが、家霊簿に記された系譜関係を読み解くために参照できるのは、天地開闢に始まり、記述当時までの各ムオンにおける黒タイ首領の系譜と事績を詳細に記している『クアム・トー・ムオン』にほとんど限られる。1970年代までに『クアム・トー・ムオン』は、ムオンラー (Mường La)、トゥアンチャウ、マイソン、ソンマー (Sông Mã)、マイソン県ムオンチャイン社 (Mường Chanh)、トゥアンザオ、ディエンビエン、ギアロなど、黒タイが居住している各地ですでに約30冊収集されたが [Đặng (chủ biên) 1977: 45]、2002年に筆者はトゥアンチャウで2写本を収集していて、民間で保管されているものが他にもあると思われる。

- 7) その内容は、ギアロ (ムオン・ロ) 盆地を最初に拓いたとされる始祖タオ・ロから、ムオン・ムオイ首領ロ・レットを経て、中越両王朝の支配領域区分をめぐる問題が顕在化し始める18世紀頃までの黒タイの英雄的な首領の事績である。
- 8) 『クアム・ファイン・ムオン』は内容に応じて、『小クアム・ファイン・ムオン (𑜋𑜂𑜆𑜨 𑜇𑜂𑜆𑜨 𑜋𑜂𑜆𑜨)』と『大クアム・ファイン・ムオン (𑜋𑜂𑜆𑜨 𑜇𑜂𑜆𑜨 𑜋𑜂𑜆𑜨)』に分類される。『小クアム・ファイン・ムオン』がある特定の首領一代の事績を語っているのに対して、『大クアム・ファイン・ムオン』は、ロ・レットから、最後のトゥアンチャウ首領でありフランス植民地下で知州に任じられていたバック・カム・クイ (𑜋𑜂𑜆𑜨 𑜇𑜂𑜆𑜨 𑜋𑜂𑜆𑜨) に至る約20代にわたる首領の事績を述べている。



1926年に書写記された『クアム・ファイン・ムオン・ノイ』写本
(2002年11月、トゥアンチャウにて)

もちろん年代記と家霊簿の間で、首領の祖先に関して記述の一致しない箇所がある。しかも、年代記『クアム・トー・ムオン』の異本ごとに、祖先の名前や世代の数は異なっている。したがって本稿で系図を作成するにあたっては、『クアム・トー・ムオン』のある2写本に限った。その理由は次の通りである。

1970年代までに収集された『クアム・トー・ムオン』写本のほとんどが、1960年代のベトナム戦争中の爆撃による焼失と、1975年の自治区解体に伴う資料移管中の散逸により参照不可能である。ムオン・ムオイ（トゥアンチャウ）における『クアム・トー・ムオン』の1写本が、1960年にベトナム語訳されて出版され [Cầm và Cầm (dịch) 1960], さらに『ターイ族歴史文化資料』[Đặng (chủ biên) 1977] で、ムオン・ラー（ソンラー）の『クアム・トー・ムオン』写本を中心に、諸地域の『クアム・トー・ムオン』を校合したベトナム語訳が出版された。しかし、筆者が見るところ、これらベトナム語訳2書には訳者による解釈が多分に混入している。ムオン・ムオイの『クアム・トー・ムオン』（1965～1967年、ルオン・ヴァン・ティックによる写本）を校注し日本語訳したとき [檜永 2003] に気づいたことであるが、『クアム・トー・ムオン』原本には主語の省略が多く「誰が」という行為主体がしばしば不明瞭である。しかも次々と新しく登場する人物名が新しい登場人物の名なのか、それともすでに登場している人物の異なるのか文脈だけからでは判断に苦しむ箇所も多い。しかしベトナム語2訳書はストーリーとして出来上がりすぎている。筆者を悩ませた主語の問題、同人異名の問題がときには訳者の強引なつじつま合わせで解決されているにちがいない。したがって本論文では筆者自身が校注した『クアム・トー・ムオン』（ルオン・ヴァン・ティック写本）を用いる。これを本稿では「クアム・トー・ムオン・ムオイ」と呼ぶ。あと1書が先述の「クアム・トー・ムオン・ムアツ」である。これも原文が参照可能であったからである⁹⁾。

なお [系図資料1] と [系図資料2] は、拙稿 [檜永 2005] ですでに公表済みである。またIV部、V部、VI部は、ベトナムで公刊された『マイソンのロ・カム一族の家霊簿』[Cầm và Kashinaga 2003] と重複する資料を含んでいる。本稿がこれら切れ切れに発表されたものの再録を含んでいるのは、影印、黒タイ語校注、日本語校注が一冊にまとまっていた方が、研究者が用いやすいと思われたからである。また、本稿は筆者が東京大学大学院総合文化研究科に提出した2006年度博士学位論文『黒タイの父系理念と祖先祭祀 — 家霊簿資料を例として』別冊資料篇の一部を加筆修正したものとなっている。なお、本書のVI部の資料はカム・チョンが提供してくださったもの

9) この全文はすでに『タイの慣習法』[Ngô và Cầm 1999] で、黒タイ文字による校訂文とベトナム語訳が紹介された。その後、筆者も訳注を付して日本語訳をすでに出版している [檜永 2001]。

であり、V部の黒タイ語による脚注がカム・チョンと樫永真佐夫による共著部分、その他の箇所の記述と作図が樫永による単著である。国立民族学博物館機関研究「テキスト学の構築」（代表者：齋藤晃助教授）の研究の一環として本書を公表する。

I 部引用文献

樫永真佐夫

- 2000 「ベトナムにおける黒タイ表記の変遷 — 少数民族の文字文化」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』第2号, 風響社, 133-178頁。
- 2001 「資料：ムオン・ムアットの黒タイ慣習法」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』第3号, 風響社, 284-351頁。
- 2003 「(注釈) クアム・トー・ムオン — ムオン・ムオイにおける黒タイ年代記」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』第4号, 風響社, 163-243頁。
- 2005 「ベトナムにおける黒タイ家霊簿の現在」長谷川清, 塚田誠之編『中国の民族表象 — 南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社, 279-301頁。

末成道男

- 1995 「ベトナムの『家譜』」『東洋文化研究所紀要』127: 1-42頁。

多賀秋五郎

- 1955 「古譜の研究」『東洋史學論集』4: 47-110頁。

Cầm Trọng và Cầm Quỳnh (dịch)

- 1960 *Quả Tổ Mưỡn (Kể chuyện bản mường)*. Hà Nội: Nhà xuất bản Sử học.

Cầm Trọng và Kashinaga Masao

- 2003 *Danh sách tổ tiên họ Lò Cầm Mai Sơn - Sơn La: 洛 氏 10 世 世 系 表 1916 年*. Hà Nội: Nhà xuất bản Thế giới.

Cầm Trọng và Phan Hữu Dật

- 1995 *Văn hóa Thái Việt Nam*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa dân tộc.

Đặng Nghiêm Vạn (chủ biên), Cầm Trọng, Khả Văn Tiến, Tông Kim Ẩn

- 1977 *Tư Liệu về Lịch sử và Xã hội Dân tộc Thái*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.

Ngô Đức Thịnh và Cầm Trọng

- 1999 *Luật tục Thái ở Việt Nam (Tập quán pháp)*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa Dân tộc học.

Tổng cục thống kê (biên soạn)

- 2001 *Báo cáo kết quả điều tra toàn bộ: Tổng điều tra dân số và nhà ở Việt Nam 1/4/1999*. Hà Nội: Nhà xuất bản Thống kê.